

ゆくのき通信 第9号 2011年11月



目次

特集：京大植物園観察会終了に寄せて

「開かれた大学」を俟つ	石田紀郎	2
第100回観察会を終えて	影山貴子 + 久松ユリ	3
学べる植物園	今村彰生	5
観察会に参加して	橋川篤子	8
京大植物園へのいざない	高田道子	9
みんながガイドの観察会	大石高典	10
資料1：京大植物園観察会開催記録（第1～100回）		11
資料2：観察会の手順（参考）	影山貴子 + 久松ユリ	15
編集後記		16

表紙画 寺田 晶英

シンボルイラスト かじわられいこ

「開かれた大学」を俟つ

石田紀郎

人間環境大学特任教授

元京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

「開かれた大学を目指します」とは一時期に流行ったフレーズである。インターネット検索で、開かれた大学とはどんな大学だろうか調べてみると、なかなか楽しいものである。キャンパス内を市民が自由に散歩できるようにしていますというものもある。なるほどなと感心する。次に多いのは、教養講座を学内で開催しているので、ぜひともご参加くださいとある。あるいは、大学設備の見学日を設けており、教員が案内しますとある。まあ、これなどは、いわゆるオープンキャンパスの一種で、自校の宣伝を社会貢献のように言い換えているだけだろうと言いたくもなるが、本人はまじめに思っているようでかわいいものである。

同じように、市民を学内に招くとしても、図書館の市民利用のサービスを実行している大学があり、好感が持てる。いずれにしても、どの大学でも市民を学内に呼び込んで、教えてやろうというのが下地にあり、市民と積極的に接したいと思っている教員が少なく、たぶん担当者を選任することで苦勞しているだろうと思う。すなわち、本当はやりたくないのだが、社会の風潮と趨勢や、文科省の意向もあるから「開かれた大学」の体裁を整えておかなければとの対応である。京大にもそんな市民相手の講座があった。

開かれた大学とは、それではどんなものかと思っているのかと訊ねられたとしたら、市民社会が直面している困難を市民とともに解決する努力を大学の構成員（特に教員）がすることだろう。そして、その逆の、大学が抱えている問題を市民と議論することによって、市民に支持された大学となるだろうというような姿勢を大学が持つことだろう。いずれにしても、一方的に呼び込み、教えるのが大学ではないだろう。

福島原発の崩壊とその被害を発生させたことに関して、京大の原子力工学教室の関係者は何をしたかを市民は監視・観察しておいて欲しい。筆者が代表を務める NPO 法人・市民環境研究所¹は、京都大学工学研究科原子力工学専攻の専攻長に、福島原発崩壊と原子力研究者の責務・反省を市民に対して話してほしいと申し込んだが、専攻長は逃げの一手であり、実現しなかった。現在の京大を象徴している。

筆者は「開かれた大学」などとは言わなかったが、研究者の在りようを求めて、公害や環境問題発生現場を 40 年ほど歩いてきた。そして、公害なんぞを調査する奴は、二流、三流の研究者だといわれながら、結局はそれ以下の研究者として人生を終わりそうである。それでも、多くの現場で、多くの科学的にものごとを考えると市民と合い、こちらが高めていただいた。

京大を退職して、京都学園大学のバイオ環境学部の準備室で働き、一期生と一緒に大学を卒業した。京都学園大は亀岡の水田と小高い山の間にある。準備室に入って最初にしたことは、学生の作物栽培実習用の田んぼを借りることだ

¹ 「市民環境研究所は、地域で、あるいは大学で、様々な課題を考え、活動をする人たちが集う場です。」(URL: <http://www13.plala.or.jp/npo-pic/>)

った。1 回生全員が半期ではあるが、畑で作物を栽培した。素人の私たちの指導だから、学生は困っただろうが、私には目論見があった。1 年、2 年と経過すれば、地域の百姓がきっと見るに見かねて助けてくれるだろう。そんな百姓の出現を待てばよい。1 回生が右往左往しているのをきっと見ているに違いないと思っていた。

そして、3 年目に百姓が現れた。無償で 4 人ほどが手伝ってくれた。今どきの農村で、20 歳前後の男女が田んぼに入っているだけで、それは村の祭りのようなものである。かくして、大学と地域とのつながりが広がって行った。大学とは、お高く止まっている存在ではなく、周辺地域の人々と交流するチャンネルをいっぱい準備し、教え教わる存在でなければならない。



写真 作物栽培実習の風景（亀岡市曾我部町）

植物園を考える会は、京大というお高く止まっている大学を市民に開放し、市民も、職員も、教員も、学生もが高め合った活動であったと思う。大学が準備し、専門家が壇上から市民を教えるのではない大学があることを示された。こんな活動を、京大という大学が評価してくれるようになり、京大が真に「開かれた大学」になることを期待して待っていようと思う。

第 100 回観察会を終えて

影山貴子

京都大学理学研究科生物科学図書室・元職員

久松ユリ

京都大学理学研究科生物科学図書室・職員

去る 2011 年 7 月 21 日、第 100 回京大植物園観察会が開催されました。2003 年 4 月より毎月続いた観察会は、この 100 回をもって終了しました。記念すべき最終回のガイドは、第 1 回観察会のガイドでもある今村さんにお願ひしました。

2002 年に行われた植物園環境整備における樹木伐採がきっかけとなり、当初はいろいろな考えの人たちが危機感を持って植物園の周りに集まってきました。その中で私たちは、様々な形で植物園と関係している人々と京大当局が対立するのではなく、植物園のあり方についてそれぞれの立場から自分自身の問題として考え話し合う場所を提供するため、「京大植物園を考える会」（以下「会」）を創設しました。大げさなことは避けたかったのですが、大勢の方の支援が必要と考え、同じ考えをもつ人たちとともに、会設立の賛同を得るための署名運動をおこしました。全国各地から署名が集まり、植物園のより良い運営を希望する要望書に署名を添えて理学研究科長へ届けました。会は、植物園をめぐる諸問題を話し合うシンポジウムや当局への提言、運営に関する数々の申し入れなどを行い、またそれらの活動と並行して、植物園を多くの人に知ってもらうため月に一度の観察会を続けてきました。

この植物園は、街中のキャンパス内にありながらひっそりと目立たず、学外だけでなく学内でも知る人が多くありません。いったん足を踏み入れ

ると山中に迷い込んだような錯覚に陥ります。東山連峰から吉田山、糺の森、京都御苑、賀茂川、京都府立植物園、船岡山、双ヶ丘へと連なる京都盆地の緑地帯のひとつとして、鳥や虫や動物の活動のために重要な位置を占めています。90年近くの歴史を持つ植物園の移り変わりの中で、観察会を重ねるごとに、私たち自身尽きることなく学び楽しめる植物園であることを改めて知ることができました。動植物の様々な営みを育ててきた植物園の魅力を少しは掘り起こせたのではないかと思います。しかし観察会を始めた頃には100回まで続けることになるとは考えていませんでした。こういう活動につきものの裏方の作業は楽しくもあり、苦心もありました。



写真1 観察会終了について説明する

最初は専属のガイドさんがおられたのですが、そのかたが就職で離れられたため、毎回いろいろな専門の研究者等の中からガイドさんを探すことが必要になりました。まずガイドをお願いして、引き受けてくださるようでしたら日程を調整します。日取りが決まれば植物園利用申請を提出します。許可が出たらガイドさんにテーマを決めていただき、チラシやポスターを作成・配布します。メールでも可能な範囲にお知らせを送ります。当日は受付とガイドさんのアシストをし、観察会が終わったら参加者から感想文を回収します。ホームページ

ージへ感想文と写真のアップをする頃には次回のガイドさんを見つけなくてはなりません。1か月は短く、常になんらかの作業をしていました。ガイドをお願いすると、ほとんどのかたが快く引き受けてくださったことが続けられた要因である気がします。動植物のみならず、植物園にまつわる様々なテーマ(資料1参照)で行われた観察会は、他とは一味ちがった観察会として、学内だけでなく遠くから楽しみに参加される方々も定着していました。

しかしこの8年余りの間に多くの変化もありました。大学という学びの場は次へのステップの場でもあるということ強く認識しました。活動を支えてくださった院生の人たちが、就職や研究の場の異動で次々に京大から去りました。職員たちも定年を過ぎ、あと数年で全員が大学を去ることになりそうです。そのため今までのように観察会を継続するには難しい状況になってしまいました。新しいスタッフの育たなかった理由のひとつに、最近は学生自治会をはじめとして、団体が何か共通の目的を持って行動する若い人が極端に減ったことが挙げられます。またスタッフの多くが職員のため、学部学生さんの参加しにくい昼休みの時間にしか観察会が設定できなかったのも痛手でした。それでも100回まで続けることができたのは、積極的にボランティアとしてガイドを引き受けてくださった人たちだけでなく、ことあるごとに手を貸してくださった院生の人たち、そして毎回観察会を楽しみにしてくださった参加者がおられたからに他なりません。そして、表にはあらわれませんが、常に会の活動を気にして声をかけてくださる大勢の方の存在も心強いものでした。参加者からは、これまでは気にもとめずに過ごしていた生き物たちと出会い、専門家の説明を聞くことで

毎回新しい発見があり、これまでとは違った考え方ができるようになったという意見も多く寄せられています。それを聞くにつけ、続けて良かったとつくづく思います。観察会を継続してみても「身近な自然や生き物の存在に気付くということが観察会の機能であること」また「地域の方々に憩いと学びの場を提供すること」の重要性を実感しています。



写真2 今年(2011年)もユクノキの開花がみられた

今後の観察会については、社会に開かれた大学への期待が高まっている昨今ですので、京都大学(あるいは理学部)主催の京大植物園観察会を提案したいと思っています。また観察会継続を強く希望しておられる学外の方が、独自の開催方法を模索しておられますし、この4月に発足した理学部社会交流室へ観察会の共催を申し入れる動きもあります。私たち会の事務局を担ってきた者は、新たな計画からは退かせていただき、これまでの資料のとりまとめ、可能な範囲で記録を残しておきたいと思っています。ずっと続けたかった観察会ですが、今後は皆さんの力でもっと良いかたちに作上げられることを心から願わずにいられません。

学べる植物園²

今村彰生

大阪市立自然史博物館外来研究員

足かけ9年の観察会が最終回を迎えました。第1回のガイドが2003年4月10日でしたので、随分経ちました。確かに継続は力なりですが、この間、私の肩書きも4回変わりましたし、継続していると年をとります。通算で20回以上ガイドをさせていただいたとのことですが、理学部植物園の教育面での利用価値や文化的な価値について自分自身が理解を進めながら、毎回のテーマを考えては解説のための勉強をする、という作業に手間と時間をかけてきました。

最初と最後、というお役目ですから、初回の話やガイドを務める中で学んできたことなどを織り交ぜながら、「京大理学部附属植物園の本質的な価値について考える」という「考える会」の本質に立ち返るために、「学べる植物園」というテーマにしました。

まずは、定番中の定番、植物園入り口付近のチャンチンモドキ(ウルシ科)です。チャンチンモドキ(*Choerospondias axillaris*)はウルシ科チャンチンモドキ属の植物です。かつて、第三紀鮮新世には東アジア、東南アジアに広く分布していましたが、現存する近縁種がなく1属1種です。現在、日本での自生地は熊本と鹿児島の一部のみです。チャンチンモドキをこの植物園で知り、いまだに果たせてはいませんが、いつか自生地を訪ねようと心に決めています。観察会を通じて、この植物

² 本稿は、京大植物園を考える会ホームページ(<http://ja3yaq.ampr.org/~bgarden/kansatu/kansatukai.html>)に掲載された、第100回観察会の「ガイドレポート」を加筆・再編集したものです。

がかつては日本でも非常によく利用されていたことや、ネパールでは今でも食料として利用されていることも知りました。平凡社の『日本の野生植物』という図鑑³での紹介写真は、この植物園の木の写真が使われています。大きな木が一本立ちで、花も果実も観察できる、という意味では、植物園が図鑑作りにも役立つわけです。



写真1 チャンチンモドキを見上げる参加者たち

では、なぜチャンチンモドキの自生地が縮小しているのでしょうか。同属仲間がないことが分類群としての衰退傾向を想起させますが、人間による生息地の破壊などを除けば、生き物の分布の変化（拡大、縮小）や、種構成の変化（絶滅する、あらたに移住してくる）といった過程やその要因を明らかにすることは、容易ではありません。

繁殖力が弱いのか、まずはそう考えるでしょう。しかし、自生地とは条件が違うはずの植物園で育っているのに、膨大な量の果実が落ちてきます。種子は大きく、直径5センチほどもあります。「見かけに種子はたくさんあっても、芽が出ないので

はないか」という参加者からの声もありました。ですが、よく探してみてください。親木の根元が実生で埋め尽くされています。むしろ繁殖力旺盛に見えます。謎は深まるばかりですが、こうした探求心を刺激してくれることこそが、理学部植物園の重大な役割だと思うのです。図鑑でも扱いに困るような植物が、目の前で花を咲かせて果実を実らせているというのは、なんとも貴重で幸せなことだと思います。



写真2 母樹の下に密生するチャンチンモドキの実生

つづいては、ハナノキ (*Acer rubrum* var. *pycnanthum*) というカエデを紹介しました。私は一度だけ、京大の生態研センター（当時は植物園内に研究室がありました）に所属していた先輩に連れられて、岐阜県にハナノキの自生地を見に行ったことがあります。



写真3 ハナノキの観察

³ 佐竹義輔、原寛、亘理俊次、富成忠夫編（1993）『日本の野生植物・木本』平凡社。

ハナノキは湿地性とされ、貧栄養土壤に自生するとされますが、そのような土地自体が開発などで失われている影響は大きいと考えられます。東海丘陵要素という植物群に数えられ、東海地方でかつて行われた某巨大博覧会イベントでも、シデコブシなどと同様に注目が集まった記憶があります。

伝統的に、カエデはカエデ科に分類されていましたが、最近の分子系統分類を反映した考え方では、カエデ属はムクロジ科に組み込まれています。モミジに代表されるカエデの仲間であるカエデ属というまとまりは崩れていないので、混乱する必要はないのですが、参加者からは「ムクロジ科??」という反応もいただきました。当然の驚きです。そこで当日は、参考書籍として『植物分類表』（大場秀章編著、Aboc社）を紹介しました。辞典としても読み物としても面白いと思います。



写真4 開花中のオオハンゲ

つづいて、オオハンゲ (*Arisaema tripartitum*, かつては *Pinellia tripartita*) というサトイモ科の植物を紹介しました。やはり、理学部植物園で初めて見ました。野生のものが見たいという衝動にかられましたが、近くにはなさそうです。京都市近郊の常緑広葉樹林にもかつては生息したのかもしれませんが、人間の影響なのか、都市近郊の林からはいろいろな植物が姿を消してしまっています。その後、霧島の鹿児島県側の山あいを通る県道の脇で群生しているのを見ることができました。ハ

ナノキと同様に湿地性で、斜面から水がしみだしている所でした。足下にヒルが殺到してきましたが、それよりもずっと興奮したことを覚えています。サトイモ科で近縁のムサシアブミという植物も、この植物園で初めて見てから、埼玉県狭山丘陵の河畔で見つけたことがあります。そのムサシアブミには花がなかったのですが、植物園での予習が活きて、葉っぱだけでも見分けられました。初めて出会ったという意味でもそうですし、予習が活きたということにも、感動を覚えました。

ハナノキは花の木の名のとおり、美しい花を咲かせますし紅葉も美しいものです。オオハンゲは変わった形の花を咲かせますし、果実の熟し方も興味深いものです。しかし、自生地が限られていて身近にない場合、短い花の時期に合わせることや、果実が成熟していく過程を観察することは困難です。実際、時季を外してしまうということがよくあって、悔しい思いもしてきました。その点、理学部植物園は非常に近い所にありますし、植物やその他の生き物が豊富です。紹介してきた通り、貴重なものや珍しいものもたくさんあります。なにより、頻りに足を運ぶことができ、生き物のごく短い期間での変化でも観察することが可能です。しかし、そのような植物園の価値は、見る者や利用する者によって認識されなければ価値がないのも同じです。利用者自身が学び、見る目を養わなければ、せつかくの空間も宝の持ち腐れですし、「仕分け」の盛んな世にあっては、そのまま利用できない状態に陥ってしまう危険があります。

2003年以來、この観察会のガイドを通じて、私自身が学びの場を得たことは幸運でした。しかし、観察会の狙いの一つでもあった「観察会の先の利用や学び」が行われていると感じることまでできず、それは残念です。たとえば論文業績に繋が

らないとして、敬遠されるのでしょうか。大学で「教養教育」が専門教育に比べて軽視された時期もありましたが、学ぶことの意味や価値はアプリオリではないですし、ずっと時間が経ってから感じられるはずのものです。「役に立つかどうか」という基準から離れて、シンプルに学びの場として京大理学部附属植物園が利用されつづけることを願っていますし、私はそうしたいと考えています。

観察会に参加して

橋川篤子

京大植物園観察会スタッフ・参加者

観察会 100 回おめでとうございます。ここまで支えて下さったスタッフの方々、お疲れさまでした。そして、これで終わってしまうことを大変残念に思っています。今後の運営に関する会合に出席させていただき、外部の者にはわかりにくい事情が、たくさんあることに気づきました。私は、16 回しか参加できませんでしたが、他の観察会にはない視点があって、気に入ってました。虫はそれほど詳しくありませんでしたので、気づくことも多く、地衣類は名前を知っていたぐらいで、実物を見たのは初めてでした。少しずつ成長していることも驚きで、身近にある木々を見る目が、変わりました。ルーベ持参で歩きたくなるほどに。

科学読み物研究会の読書会に、参加していますので PR したら、ここの近くの人や何人か来て下さっていました。開催日程が定期的ではないので、参加しにくいとも言われました。実は私も 2005 年 1 月に初めて参加しそれが木曜日で、近くに住んでおらず、情報源もありませんでしたので、それ以

後は、毎月木曜日にされていると思っていました。その頃は、自宅介護中の在宅日で外出できず、参加できないものとあきらめていました。介護を終え、昨年 3 月からは、ほぼずっと参加させていたでています。先日初めて今までの記録を拝見し、知っていれば参加できた日や、関心のあるテーマもあったのにと思いました。



写真 観察会の受付を手伝う筆者

歴史のある樹齢の古い木がある、あの空間を一般の私たちから閉じてしまわれるのは、とても残念に思います。第 100 回の観察会で紹介されたチャンチンモドキ。分布地が少ないとお聞きしましたが、初めて見たのは万博公園で、もっと低い木でした。関東在住の葉っぱに詳しい葉画家（葉っぱの絵を描く人）の知人に話すと、どんな木か知らないし、見たこともないと言われ、それほど珍しいものなのだと思いました。植物園の門を入ってすぐにあるユリノキやセンダンもですが、競うように高く育っていて、この木 1 本にしても貴重なものだと思います。学生さんの研究が、広範囲にわたるとはいえ、近くにいいフィールドがありますのに、もったいなくて。森には、さまざまな効果があるとも聞いていますので、全学部の方々に PR され

ばいいように思います。最近、学内でも吉田キャンパスにおられる方は、ここに植物園があることをご存知ないことも多いとお聞きしてびっくりしました。

私自身は、10数年前から、京都御苑の四季の観察会とトンボ池の観察会、万博公園の月1回(7、8月は休み)の観察会に参加してきました。御苑は、少しずつ世代交代してきていますが、京都自然観察学習会の鳥・虫・きのこ・植物それぞれ専門の先生が、半日にわたって説明・案内して下さいます(資料が充実、無料、毎回100名前後参加。時には観光客の方も)。万博公園は、万博が終わって40年、森の形になってきて、オオタカが営巣するようになったり、ピオトープを作って、外来生物を排除しながら整備されています。自然観察学習館指導リーダーの会こもしゃび(昆虫・森の工作教室・植物・野鳥・ピオトープの一字から命名)があり、83歳のもと小学校の先生やその教え子の60代の方々、シニア自然大学OB、緑花文化士(私も緑花試験をずっと受けていましたが、2級まででした。)の方々が、案内して下さいます。(1時間半くらい、資料あり、100円、毎回定員30名。)吹田在住の方が大半ですが、この植物園の話をするのと、大阪市大のように、自由に入れるといいのと言われています。研修もしっかりされていて、府立植物園での研修に参加させてもらいましたが、ほぼ一日今でもその時のノートを見ると歩けるほど詳しく、質の高いものでした。吹田野鳥の会の方々が、毎月定点観察され、2月に事前申込で半日園内の冬鳥を観察します。この植物園は学外からでも申し込めば利用できるのと、いつか利用したいと思います。小石川植物園のように、有料公開されればとも思います。後継者不足から言えば、

国分寺に本部がある一般社団法人 JEAN⁴という、データをとりながらピーチクリーンをしたり、海の世界を考える団体があります。少しブランクあったものの復帰しましたが、スタッフが私と同様50代で、なかなか20~30代に引き継いでもらえないと言われていいますので、どこの団体も同様のようですね。

パソコンも携帯も持っていませんので、HPは一般利用登録をしている京都精華大の情報館で見えています。プリンターは使えませんが、本や雑誌の貸出しもできます。子供から高齢者まで利用されていて、活気があり大学全体で温かく迎えて下さる雰囲気があります。他の大学の公開講座もよく利用します。大学は、このようにすべての人に開かれた場であってほしいと思います。

京大植物園へのいざない

高田道子

京大植物園観察会・参加者

「きのこ目になって下さいー。」

(きのこ目?)

「お茶はみんなクローンです。」

(えっ?)

「竹と笹の違いは?」

(みんな一緒ちゃうん?)

「蛇にはしっぽがあります。」

(全身しっぽみたいやけど...?)

と、毎回こんな調子でガイドの先生の言葉にびっ

⁴ Japan Environmental Action Network の略称。海洋ごみ問題の改善と普及・啓発を目指して取り組んでいる。1990年設立。URL: <http://www.jean.jp/>

くりさせられることが多い観察会。京大に植物園があると知ったのは、三橋節子についてのテレビ放送でだった。よく通いそこにたたずむのが好きだったと聞き、どんなとこだろうと思いついたら見ることができるのかと思っていたところ、観察会のポスターを発見！インターネットで調べたら、あるある。しかし、なかなか日程が合わず、参加できた時はとつてもうれしかった！健康のために歩き始めたが、だんだん山歩き（といっても低い山ばかりですが）をするようになり、草木や鳥などに興味がわいてきて自宅のベランダに来る蝶や鳥などと一緒に色々なことが知りたくなる。そんな中で疑問を解いてくれるのが、観察会だった。



植物園のルリヤナギ（画：高田道子）

外から見るとさして大きくない植物園のように見えるが、中にはいると大きな木もあり池まである。研究のために限られた道しか通れないので何回通っても、すべて見ているのかどうかさえわからない。そこがまた神秘的だったりして。日本にはない植物も多いらしいが、自然にまかせているようで、だんだん自生種が多くなり枯れた草木も多いと聞く。でもそんなことはおかまいなし。自分の庭のごとく月1回の散歩を楽しむ。桜がずい

ぶんと上の方で咲いていたり、でかい椿の花があったり、鳥に食べられたくわがたの頭が落ちていたり…。ガイドの先生もすごい、質問すると即座に答えが返ってくる。（さすがだ！）

知らないことって本当に多いんだと改めて気づかされた観察会。そんな観察会がなくなるのはとても残念！是非、これからも続けていってほしい。知る楽しみを教えてくれた観察会、それはまた人生を豊かにしてくれるいい機会なのだ。

みんながガイドの観察会⁵

大石高典

京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員

2006年1月からずっと、特に2009年初めまではほぼ毎日、この1.2haの小さな植物園および周辺の生き物をテーマに写真撮影による観察・記録を行い、その一部をブログ『京大植物園 TODAY』⁶を媒体として、公開してきました。2011年10月10日で開設2,100日目、投稿記事数は2,552（1.2/日）、総アクセス数は439,323 PV（128,239 IP）に達します。おおよそ、公開している写真の10倍から20倍の枚数を撮影してきましたので、手元のハードディスクに入っている写真は合計で5~6万枚以上になります。

そもそも、このブログ「植物園 TODAY」を始めるきっかけは、京大植物園を考える会の活動の中で、多くの方から「京大植物園って、どこにある

⁵本稿は、京大植物園を考える会ホームページ（<http://ja3yaq.ampr.org/~bgarden/kansatu/kansatukai.html>）に掲載された、第99回観察会の「ガイドレポート」を加筆・再編集したものです。

⁶ URL: <http://blog.goo.ne.jp/bgfanclub>

の?」「どんな生き物がいるの?」という声に多く接したからでした。意外だったのは、植物園周辺に住まわれている一般の方よりも、学内の学生や教職員からそのような声が多く聞かれたことでした。植物園はずっと、知る人ぞ知る場所だったのです。そこでまず、①その日その日の植物園の生き物や全体状況に関する情報を発信し、植物園の存在を知ってもらうこと、②正確な見回り調査はできないけれども、その日その日の動植物の動きを可能な限り記録することで、植物園に棲む生き物のフェノロジー記録として残すこと、そして、③植物園に関する資料やデータの整理、公開を行って、誰でも植物園に関心のある人が検索システムを使って知りたい情報を得られるようにすること、が目的でした。大げさかもしれませんが、①から③を一般公開条件下で行うことが、植物園とその周辺の環境について考える上で、「市民による環境監視」(故・中南元 元大阪大学講師)の役割を自動的に果たすものと考えました。



写真 オイケノカッパが棲むという園内の池

毎日観察を継続すると、様々な「発見」があります。見えてくる生き物の生活(「芽生えから枯れるまで」の生活史の観察)、資料を蓄積したり、他地域と比較することで環境の変化がわかることもあります。2011年6月23日に行われた第99回観察会では、そんなささやかな「発見」を発信する

ことをテーマに植物園を歩きました。『京大植物園 TODAY』は、ラフではありますが日々の開花結実情報を写真と共に掲載してきました。このような中長期にわたる生き物の生活記録は、工夫次第で自然観察に活用していただくことが可能です。過去5年間の各6月に、「京大植物園 TODAY」で取り上げた生き物たちのリスト(植物51種、動物8種、菌類7種)を参加者の皆さんに配布し、鉛筆やデジカメを片手に、今年状況を小グループに分かれて観察・記録していただきました。5~10回以上観察会に参加しているリピーターさんが全体の3分の1近くおられましたので、数人で組を作って頂けば、お互いの知っているイキモノに関する知識を重ね合わせて、十分に開花や結実などのフェノロジーのチェックを行うことが可能でした。植物園観察会の場合もこうなれば、ガイドは必要な時が来るまで、わき役です。特定のガイドを必要とせず、専門家もそうでないものも、参加者どうしが補い合い学び合う観察会。これもまた観察会の一つのあり方ではないでしょうか。権威づけられた専門家に教えられること、知のヒエラルキーを再生産するだけに終わってしまわないような学びの場が、この小さな植物園のわくを越えて、もっと増えてほしいと願っています。

資料1：京大植物園観察会開催記録

(作成：久松ユリ + 影山貴子 + 大石高典)

植物園観察会では、毎月1回季節や植物園の中の生き物や現象を対象にテーマを設定し、植物園と関わりのある案内人が参加者とともに植物園の中を歩いた。観察会のスタイルやテーマは、変化し続けてきた。ガイドとなる研究者や学生が、動植

物に関する最新の研究成果を目の前の生き物を材料に解説する当初の形式に加え、市民参加者の中からもガイド役を買ってでる人が出てきた。紆余曲折を経て、観察会は研究者や学生、職員、市民の立場を問わず、植物園に棲む動物や植物を媒介とした学び合いの場となった。毎回の観察会には周辺住民を筆頭に、大学教職員、学生がコンスタントに参加した。参加回数 10 回以上のリピーターが多いことは、観察会が文化として地域に根付いたことを示す。以下は、第 1 回 (2003 年 4 月 10 日) から第 100 回 (2011 年 7 月 21 日) までの全観察会の記録である。参加者の保険加入名簿に残る参加者数によれば、毎回の観察会の平均参加者数は 31 名 (SD=12) であり、参加総数は延べ 1,963 名以上に上る。(案内人の敬称略。所属は観察会開催当時のもの。案内人氏名の後の数字は、参加者数を表す。)

- 第 1 回 『春の植物園を歩こう』
案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 30
- 第 2 回 『新緑の植物園を一緒に歩きましょう』
案内人：丑丸敦史 (総合地球環境学研究所) : 23
- 第 3 回 『ユクノキの開花をみよう』
案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 17
- 第 4 回 『街中との温度差を感じよう』
案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 16
- 第 5 回 『鳥の声を聞きましょう』
案内人：梶田 学 (理学研究科動物系統学研究室) : 17
- 第 6 回 『秋の植物園～草の実・木の実を探そう』
案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 7
- 第 7 回 『シンポジウム「温故知新」記念観察会』
案内人：丑丸敦史 (総合地球環境学研究所) : 13
- 第 8 回 『晩秋の植物園～草の実・木の実を探そう～Part II』
案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 12
- 第 9 回 『師走の植物園～冬支度のいきものたち～』

案内人：丑丸敦史 (総合地球環境学研究所) : 16

第 10 回 『鳥の観察 Part II』

案内人：梶田 学 (理学研究科動物系統学研究室) : 23

第 11 回 『冬眠中の虫たち』

案内人：大橋和典 (農学研究科昆虫生態学研究室) : 21

第 12 回 『春を待つ生き物たち』

案内人：丑丸敦史 (総合地球環境学研究所) : 18

第 13 回 『じぶんの花をみつけよう』

案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 49

第 14 回 『夏のはじまり～植物園から飛びだそう～吉田山の散策～』

案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 17

第 15 回 『六月の吉田山～夏至の候をたのしむ(吉田山の散策 2)』

案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 11

第 16 回 『七月の植物園～木陰のいきものたち～』

案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 23

第 17 回 『秋風を待つ植物園』

案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 18

第 18 回 『秋のいきものを見つけよう』

案内人：大橋和典 (農学研究科昆虫生態学研究室) + 今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 28

第 19 回 『たねや芽生えをさがそう』

案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) : 30

第 20 回 『植物園で染料をさがそう』

案内人：有元高太 (染色家、なぞやしき) : 18

第 21 回 『ロシアからやって来た小鳥を探そう』

案内人：梶田 学 (理学研究科動物系統学研究室) : 41

第 22 回 『生きものたちの冬越し』

案内人：吉本治一郎 + 大橋和典 (農学研究科昆虫生態学研究室) : 36

第 23 回 『樹木の立ち姿をみてみよう』

案内人：丑丸敦史 (総合地球環境学研究所) : 36

第 24 回 『植物園内に残る古代の遺跡』

案内人：清水芳裕 (文化財総合研究センター) : 23

第 25 回 『咲きかた、散りかた、実りかた』

案内人：今村彰生 (総合地球環境学研究所) + 大橋和典 (農学研究科昆虫生態学研究室) : 51

第 26 回 『はなやかな葉っぱ』

- 案内人：今村彰生（総合地球環境学研究所）：48
- 第27回 『ツユときのこ』
案内人：今村彰生（総合地球環境学研究所）：20
- 第28回 『夏の虫たち』
案内人：吉本治一郎（農学研究科昆虫生態学研究室）：25
- 第29回 『植物園で染料をさがそう Part II』
案内人：有元高太（染色家、なぞやしき）：26
- 第30回 『秋のみどり』
案内人：今村彰生（総合地球環境学研究所）：39
- 第31回 『水辺の植物たち』
案内人：細 将貴（理学研究科動物生態学研究室）：31
- 第32回 『鳥と木の実』
案内人：湯本貴和（総合地球環境学研究所）：73
- 第33回 『“ツリーイング” ってなんだろう？～植物園の大きな木をみてみよう～』
案内人：村尾嘉彦（滋賀県新旭水鳥観察センター）：22
- 第34回 『森で語ろう～京大植物園が育むサブカルチャー～』
案内人：中島和秀（理学研究科付属植物園）＋大石高典（理学研究科人類進化論研究室）：36
- 第35回 『虫たちの越冬場所～植物を寝床に～』
案内人：嘉田修平（農学研究科昆虫生態学研究室）：32
- 第36回 『北部の春（きたぐにのはる）』
案内人：門川朋樹（理学研究科植物分類系統学研究室）＋大石高典（理学研究科人類進化論研究室）＋中島和秀（理学研究科付属植物園）：32
- 第37回 『タンポポから探る、生き物の分布』
案内人：西田隆義（農学研究科昆虫生態学研究室）：39
- 第38回 『植物が作る謎の部屋ーダニ室をのぞいてみよう』
案内人：西田佐知子（名古屋大学博物館）：41
- 第39回 『植物園のきのこたち』
案内人：小寺祐三（関西菌類談話会）：45
- 第40回 『植物園の苔観察～しゃがんでこそ見える世界もある～』
案内人：秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）＋大石善隆（農学研究科環境アサイン学研究室）：54
- 第41回 『植物園と吉田山』
案内人：土屋和三（龍谷大学文学部）：38
- 第42回 『森で語ろう part II』
案内人：坂本三和（フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所）：50
- 第43回 『植物園を含む京大北部キャンパスの地形見学と花折（はなおり）断層』
案内人：竹村恵二（理学研究科地球熱学研究施設）：47
- 第44回 『植物標本と植物園』
案内人：村田 源（元理学部植物学教室講師）＋河野昭一（京都大学名誉教授・元総合博物館館長）：66
- 第45回 『ドングリからさぐる植物の分散戦略』
案内人：西田佐知子（名古屋大学博物館）：20
- 第46回 『シダの多様な生活』
案内人：瀬尾明弘（総合地球環境学研究所）：35
- 第47回 『イヌビワについて』
案内人：小吹和男（日本自然保護協会自然観察指導員）：30
- 第48回 『春の雑草』
案内人：三浦励一（農学研究科雑草学研究室）：45
- 第49回 『春爛漫』
案内人：三原 等（まつたけ十字軍運動）：41
- 第50回 『京大植物園花の地図をつくろう』
案内人：西田佐知子（名古屋大学博物館）＋坂本三和（フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所）：43
- 第51回 『ナミテントウの観察』
案内人：大澤直哉（農学研究科森林生態学研究室）：35
- 第52回 『虫たちのえさと住みか』
案内人：吉本治一郎（農学研究科昆虫生態学研究室）：17
- 第53回 『森で語ろう Part III』
案内人：森島 映（AUX）：23
- 第54回 『京大植物園花の地図を作ろう Part II』
案内人：西田佐知子（名古屋大学博物館）＋坂本三和（フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所）：23
- 第55回 『ミツバチのコロニーの観察』
案内人：清水 勇（生態学研究センター）：18

- 第56回 『昔のエピソードを聞きながら晩秋の京大植物園を一緒に歩いてみませんか』
案内人：田端英雄（岐阜県立森林文化アカデミー）：67
- 第57回 『冬の植物観察、小さな世界をのぞいてみよう』
案内人：佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）：14
- 第58回 『タラヨウとイスノキの話』
案内人：小吹和男（日本自然保護協会自然観察指導員）：16
- 第59回 『越冬中の虫たち』
案内人：吉本治一郎（農学研究科昆虫生態学研究室）：26
- 第60回 『アオバズクの育った森』
案内人：西村和雄（フィールド科学教育研究センター）：31
- 第61回 『ゲンペイシダレモモの話』
案内人：小吹和男（日本自然保護協会自然観察指導員）：22
- 第62回 『草を見て歩こう』
案内人：田中 聡（農学研究科雑草学研究室）：28
- 第63回 『小さな竜を探そう』
案内人：大淵希郷+片山 亮（理学研究科動物系統学研究室）：21
- 第64回 『トトロをさがそう』
案内人：鎌田東二（こころの未来研究センター）：23
- 第65回 『苔じゃないコケの話』
案内人：有元高太（染色家、なぞやしき）：33
- 第66回 『植物園、秋のにぎわい』
案内人：本間 淳（理学研究科動物行動学研究室）：38
- 第67回 『網はクモのココロの窓』
案内人：渡部 健（a環境研究所）：33
- 第68回 『ゆく秋を見る』
案内人：小吹和男（日本自然保護協会自然観察指導員）：56
- 第69回 『植物園の落葉落枝（ごもく）たち』
案内人：中島和秀（理学研究科付属植物園）：32
- 第70回 『植物園内の冬鳥たち』
案内人：梶田 学（理学研究科動物系統学研究室）：34
- 第71回 『お茶の話』
案内人：林屋和男（日本茶インストラクター協会）：30
- 第72回 『苔じゃないコケの話 Part II』案内人：有元高太（染色家、なぞやしき）：20
- 第73回 『池の中に広がるミクロの世界』
案内人：大塚泰介（滋賀県立琵琶湖博物館）：29
- 第74回 『フィールド研の見本園観察』
案内人：山内隆之（フィールド科学教育研究センター）：35
- 第75回 『植物園でみられる湿地植物』
案内人：藤田 昇（生態学研究センター）：41
- 第76回 『集まる虫たち』
案内人：吉本治一郎（農学研究科昆虫生態学研究室）：37
- 第77回 『森で語ろう Part IV』
案内人：くすきしんいち（ミュージシャン）：26
- 第78回 『パショウとバナナの楽しみ方』
案内人：佐藤靖明（大阪産業大学）+倉谷禮子（観察会参加者）：24
- 第79回 『きのご眼で植物園を見よう！』
案内人：小田貴志（滋賀県立近江富士花緑公園）：29
- 第80回 『一本の枝が語ること』
案内人：八田洋章（樹形研究会）：36
- 第81回 『トトロを探そう Part II 〜どんぐりから追跡する〜』
案内人：鎌田東二（こころの未来研究センター）：20
- 第82回 『初春の椿』
案内人：小吹和男（日本自然保護協会自然観察指導員）：13
- 第83回 『落ちて実やタネをさがそう』
案内人：内貴章世（大阪市立自然史博物館）：28
- 第84回 『啓蟄の虫たち』
案内人：吉本治一郎（農学研究科昆虫生態学研究室）：18
- 第85回 『植物行動学』
案内人：幸島司郎（野生動物研究センター）：20
- 第86回 『春の虫たち』
案内人：嘉田修平（農学研究科昆虫生態学研究室）：20
- 第87回 『色の名前と自然観察』
案内人：有元高太（染色家、なぞやしき）：18
- 第88回 『身近なカエルたち』
案内人：原村隆司（理学研究科動物行動学研究室）：26

第89回 『夏の昆虫の歩み〜アリとバッタと時々オサムシ』

案内人：奥崎 穰（理学研究科動物生態学研究室）：30

第90回 『植物園のチョウとその食草』

案内人：鈴木紀之+秋山耕治（農学研究科昆虫生態学研究室）：26

第91回 『ダンゴムシとその仲間たち』

案内人：石田 惣（大阪市立自然史博物館）：23

第92回 『11月参加特別観察会』

案内人：丑丸敦史（神戸大学人間発達環境学研究室）、今村彰生（京都学園大学バイオ環境学部）：51

第93回 『植物園内樹木のナラ枯れについて』

案内人：二井一禎（農学研究科微生物環境制御学研究室）：40

第94回 『京都盆地の冬鳥』

案内人：和田 岳（大阪市立自然史博物館）：30

第95回 『苔でないコケの話 Part III 観察の旬〜地衣類を探してみよう〜』

案内人：有元高太（染色家、なぞやしき）：20

第96回 『春の野草』

案内人：三浦励一（農学研究科雑草学研究室）：38

第97回 『植物園の竹を楽しもう』

案内人：柴田昌三（フィールド科学教育研究センター）：31

第98回 『放射線の線量と生物への様々な影響』

案内人：米井脩治（京都大学名誉教授）+秋山秋梅（理学研究科環境応答遺伝子科学研究室）：43

第99回 『京大植物園 TODAY：発見を発信してみよう』

案内人：大石高典（アフリカ地域研究資料センター）：23

第100回 『学べる植物園』

案内人：今村彰生（大阪市立自然史博物館）：41

資料2：観察会の手順（参考）

（作成：影山貴子 + 久松ユリ）

1) ガイドをお願いしたい方とコンタクトをとり、日取りとテーマを相談する。

2) 日が決まったら利用願いの申請書類を理学研究科生物科学事務室へ提出する。利用日の2週間前までに提出しなければならぬ。学外者の申請

には京都大学教職員の紹介者が必要。

3) 許可が出たらガイドさんに知らせる。テーマを確認し、チラシとポスターを作成する。同時にHPにアップ、案内メールを送付するなど宣伝をする。予めポスターやチラシを引き受けてくれる協力者を探しておく。

4) ガイドさんに、予め準備するものや当日配布の資料があるかどうか聞いて早めに手配しておく。

* 準備の例としては、ルーペ、双眼鏡、地図、色鉛筆、配布用紙など。資料はなるべく早めに原稿を受け取りコピーを作成しておく。（観察会当日渡されて困ったこともよくあった。）

5) 当日の写真係を予約しておく。

6) 観察会当日は開催20分前より受付用の机を置いて受付用品一式（参加者名簿用紙、感想文用紙、鉛筆、台紙、名札、カンパ箱など）をならべ、準備をする。リクレーション保険をかけるため、参加者名簿が必要なので名前と住所を書いてもらう。資料と名札を渡す。ガイド、アシスタントにも名札をつけてもらう。観察会が始まって、遅れてくる人のために受付で少々待つ。

7) 観察会中は参加者が通路からはみ出ないように、また実験中の野外装備に支障が無いように注意する。ガイドの補助をする。

8) 終了数分前には受付に戻り、感想文用紙と筆記具を渡す準備ををする。戻ってきた参加者から名札を回収する。感想文を書いて貰う。ガイドさんにも後日ガイドレポートをメールでもらえるようお願いする。

9) 感想文およびガイドレポートをパソコン入力し、HPにアップする。当日の写真を写真係からもらって数枚選別し、キャプションをつけてHPにアップする。ガイドさんへお礼状とともに参加者の感想文を送る。

10) その他

★ 部屋を借りての開催の場合など、部屋の予約、プロジェクターや顕微鏡の手配など必要に応じて準備する。

★ 遠方から来ていただくガイドさんには交通費の実費を支給する。会計係が必要。

★ 観察会終了時には受付用品参加者名簿用紙、感想文用紙、鉛筆、台紙、名札、カンパ箱などをチェックし、適宜整備・補充する。雨に濡れた場合は干して乾かす。

★ 参加者からのメール、電話、直接など様々な問い合わせへの対応が必要。

編集後記

京大植物園を考える会の基幹をなす活動の一つであった植物園観察会が、その幕を閉じました。本号の僅かな紙面では、とても8年間半にわたる観察会活動の総括を行うことはできません。しかし、活動の開始、継続、展開に関わってきた方々のうち、中心的な役割を担ってきたみなさんからご寄稿いただきました。

石田紀郎さんには、考える会発足時からミーティング場所を提供していただき、活動の相談に乗っていただきました。影山貴子さんと久松ユリさんは、観察会活動の一番「しんどい」部分を事務局の立場から支えてこられました。最初と最後の観察会でガイドを務められた今村彰生さんは、観察会の発案者の一人でもあります。橋川篤子さんと高田道子さんは、観察会後半の熱心な参加者でした。特に橋川さんには、外部からのスタッフとして観察会の運営に加わっていただきました。

最後に、観察会開始以前から10年以上にわたって植物園に園丁として勤務され、毎回の観察会に大学職員として立ち会われてきた中島和秀さんからは、本号への文章寄稿の代わりに、短歌を一首送っていただきました。ご紹介して終わりたいと思います。

京大植物園観察会100回を言祝ぎて

市中の秘密の森を開かんと集へる人に老い時雨かな

2011年10月10日

大石高典

京大植物園を考える会ニュースレター

ゆくのき通信 第9号

発行：2011年11月15日 京大植物園を考える会

印刷：株式会社北斗プリント社

事務局：〒606-8799 左京郵便局私書箱5号

URL: <http://ja3yaq.ampr.org/~bgarden/>

E-mail: kyotoubg@gmail.com